

アジアの日本人学校における保健体育授業の

実態に関する調査研究

平石 雄大 (広島大学)

1. 目的

本研究では、日本人学校における保健体育授業の実態を明らかにするために、アジア地域の日本人学校に焦点を当て、各校の共通点及び相違点から、国内水準の教育及び海外環境を活用した教育の推進方策について検討することを目的とした。

2. 方法

- 1) 調査対象：アジア地域の日本人学校において、保健体育授業を担当した経験がある教員 6 名を対象とした。
- 2) 調査内容及び調査方法：調査内容は、①児童・生徒について（児童・生徒数、体育の技能など）、②環境について（体育施設・設備、気候、外部の安全面など）、③教員について（教員数、業務量など）、④授業について（教材・教具、授業形態、学習評価など）、⑤その他（学校の特性、問題点など）、の 5 項目であった。調査方法は、Web 会議システム Zoom を用いて、半構造化インタビューを行った。
- 3) 分析方法：インタビューの内容を逐語記録化し、①～④の質問項目と回答を表に整理した。また、⑤の質問項目及び各学校の特徴が表れている発言は帰納的に分類した。それらをもとに、6 つの日本人学校の共通点と相違点について分析し、国内水準の教育及び海外環境を活用した教育の推進方策について検討した。

3. 結果と考察

- 1) 6 つの日本人学校の共通点と相違点
児童・生徒数は、学校ごとに大きなばらつきがあり、児童・生徒の少ない学校では、複式で保健体育授業が実施されていた。また、施設・設備や教材・教具は、学校で充実度に差が見られ、日本人学校の児童・生徒は、日本国内の学校の児童・生徒と比べると、体育技能の低さが窺えた。さらに、学校外の環境については、安全に配慮しなければならない地域が多いといえる結果となった。

2) 日本人学校における国内水準の教育

国内水準の教育を推進する上での課題として、複式での授業が挙げられた。また、複式で授業を行う学校では、学年ごとにテストの内容を変えたり、同じテストでも評価規準を変えたりして学習評価を行っていた。日本人学校では、教員や生徒の入れ替わりが激しく、それも複式での授業を難化させている要因であると考えられる。この問題を解決するためには、教員間で連携し、学校の現状に応じた柔軟な対応をしていくことが重要であるといえよう。

3) 日本人学校における海外環境を活用した教育

調査対象の 1 つであった A 日本人学校では、水泳の授業を年間 50 時間行っていることで、十分に時間を確保できていない他の運動領域があるという。このような授業形態は、現地の気候を活かした取り組みであるといえる一方で、児童・生徒の学習に対する影響についても十分に考慮される必要があると考えられる。

他方、児童・生徒の保護者や現地の日本人会は、日本の文化に触れるような教育を望んでいる場合も多いことが示唆された。したがって、日本人学校においては、日本国内で経験できないような海外の環境を活かした教育だけではなく、日本の伝統や文化に触れるような教育も展開されなければならないと考えられる。そのため、保健体育授業に関しても、各学校に在籍している児童・生徒や保護者などの要望を把握した上で、授業内容を精査していくことが重要であろう。

4. 主な参考文献

- 1) 総務省行政評価 (2015) グローバル人材育成に資する海外子女・帰国子女に関する実態調査 結果報告書。